

図書館蔵書に対する評価は、その量よりも質にあることは言うまでもないが、その質的条件の中にもどのような稀観本（きこうぼん）

本
館
稀

観

本
所
蔵

世間に流布されていない珍しい書物）が収蔵されているかがある。については館員の立場から本館所蔵の稀観本を紹介することとした。

の中から

西洋服飾稀観書 (26) マーセラス・ラルーンの「ロンドンの呼び売り」について

司書 川島陽子

[383.133L] The cries of the city of London, by Marcellus Lauron. London, Overton, 1733. 「ロンドンの呼び売り」M. ローロン(別名ラルーン)画
17世紀末に、ロンドン市内のボウ通りを往来する人々を描いた、二部作の銅版画集である。二枚の標題紙も含めて全部で74枚の図版には、日用雑貨を呼び売りする男女、あるいは僧侶から乞食に至るまでの、多種多様な職業と社会階層が描写されている。ボウ通りは多数の有名人が住居を構え地理的にも華やかな社交の場として便利な反面、通りの一隅には下品な居酒屋があるという、社会の表裏を同時にそなえた場所だった。呼び売り商人をモチーフにした図絵は17世紀から19世紀にかけての伝統であり、この作品(The cries of the city of London)はボナール(Jean B. Bonnard, 1654—1726)のCris de Parisに続いて刊行された。しかし、他のthe cries(les cris)がほとんど下層の民衆を対象にしているのに対して、この作品は上層と下層を合せて一つの

シリーズの中に収めている。それがこの作品の一つの特色で、当時の新しい社会情勢を反映したものとみることができよう。また、図絵はカリカチュア風に誇張されているものもある。

作者マーセラス・ラルーン(1679—1772)はローロン Lauron 家の二男として生まれた。祖父ローロン(Marcel Lauron)はフランス人の画家で、家族を連れてオランダからイギリスへ渡った。父親マーセラス・ローロン(Marcellus Lauron, 1653—1702)も画家になり、オランダ派の画家ネラー(Godfrey Kneller, 1646 or 49—1723)のロンドンの絵画教室の補助員をするかたわら、聖ポール寺院内の Christ's Hospital で肖像画を描いたりしていた。そのような父親の仕事を見ながら、ラルーンはテムズ川に近いボウ通りで育った。10才頃、父親は息子の絵の中にその才能を見出し、外国へ遊学させることはしないで、彼自らの手で絵の指導をした。後にネラーの教室で学び、そこで教鞭をとった。作品は民衆画

①一枚目の標題紙には壺売りの若者が登場かなり摩り切れた古着こそ着ているが、目付きは厳しく警戒し、持ち逃げに気がつかっている



②「ベッド・マットにドア・マットはいらんかねー」ま古着に表装をされている



が多く、当時の有名な風刺画家ウィリアム・ホガース（1697—1764）とも交流があり、また有名なアントワヌ・ワトー（1684—1721）の訪英を機に彼の画風の影響を受けた。

他方、ラルーンは数回のヴェネチア訪問を機会にオペラにひかれ、彼自身もオペラ歌手としてロンドンの舞台に立ったほどである。また、スペイン継承戦争（1701—1714）ではマールボロー公（1st Duke of Marlborough）の同盟軍に職業軍人として参加した。退役後死ぬまでの間、彼の派手な独身生活を経済的に支えたのが絵画を売って得た収入だった。

ラルーンの呼称は数通りある。Laroon は本来の姓である Lauron をイギリス風に綴ったものだ。一般に同名の祖父や父親と区別するために、Marcellus the younger ないしは Captain Laroon と呼ばれることが多い。

この「ロンドンの呼び売り」は The Paul's scholar's copy-book に合刻されたもので、この本は聖ポール寺院内の Christ's Hospital の習字法教師ジョージ・シェリー（George Shelley）により初の習字帳として編纂された。これに収められているものは以下（1）～（10）の通りである。

（1）The Paul's scholar's copy-book, John Rayner 筆, 1709. アルファベットの手本。

（2）Alphabets, George Shelly 筆. 字体の手本。

（3）Penna Volans, G. Shelly 筆. 装飾組文字の手本。

（4）An essay, Robert More 著, 1716. 習字の意義。

（5）A new booke of fries work invention, J. le Pautre 画, 1676. 古典装飾の手本。

（6）A drawing book of the passions, C. le Brun 画. 顔の感情表現の手本。

（7）A drawing book, Seb. le Clerc 画. 11体の全身像。服装史研究の上でも興味深いものがある。

（8）タイトルなし, 作者不明. 多義図形。

（9）A new book of flowers and fishes, 作者不明, 1671. 花と魚の種類。

（10）The cries of the city of London (前述)

ラルーンに関する研究はきわめて困難とされてきた。画家で歌手で職業軍人という多彩なあるいは気まぐれな生き方をし、また「ホガースの模倣者」とも言われる通り、各々の分野でとりわけ注目すべき業績を残した訳でもなかった。今世紀に入り、デイヴィス（R. Davies）、ボレニウス（T. Borenus）、エドワーズ（R. Edwards）、また S. シトウェル（Sitwell）、O. シトウェルらによってやっとその解明が試みられるようになった。なおラルーンの作品解説書としては、Marcellus Laroon, by Robert Rains. London, The Paul Mellon Foundation for British Art, 1967があることを付記しておく。

妖顔③
えに上
ん流
な行
な階
魅の級
力の女性
の付け
漂黒性
う子
「ロ（ほく
ンドを
ン）を
の付け
娼女
婦」は
シナ
である
をつくり
たい



不④
お相
恵応
みな
のロ
のン
の良
のド
の帽
の格
の乞
は好
を食
をこ
のて
一い
家手
の引
唯羽
一飾
のの
商と
売れ
道具
か子
か供
かたは
か金
か身
か持

